

ミュージアム・アイズ

MUSEUM EYES

Vol.52
2009

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

特集

明治大学文学部 共同企画
明治大学博物館

2009年度

春季特別展

東アジア
海のシルク

陶磁器 茶文化 東西交易 水中考古

ロードと“福建”

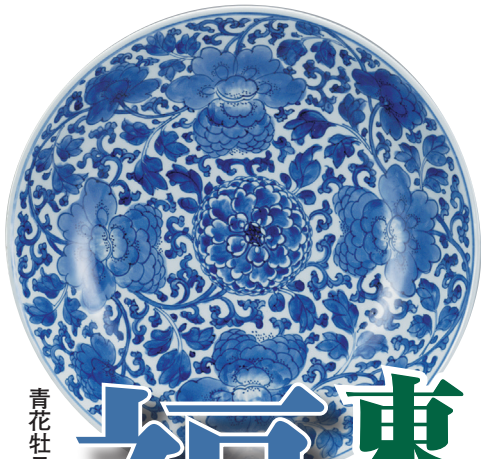


- 博物館ニュース
入館者 25 万人達成！！
- 展示&リサーチ
明治大学東アジア石刻文物研究所
の活動と展示
企画展 国づくりと文字・伝承
- 市民レクチャー
杉原荘介先生と市川市の遺跡（上）
- 学芸研究室から
大名と領地（上）
- 収蔵室から
蓬萊鏡



加彩宮女俑（五代・930年）福州五代劉華墓出土
中国福建博物院蔵
五彩花鳥文盤（明末・17世紀）漳州窯
愛知県陶磁資料館蔵
建盞（南宋・12～13世紀）建窯
中国福建博物院蔵

明治大学博物館



青花牡丹文盤 (景德鎮窯 清・17〜18世紀)

東アジア海のシルクロードと福建

4月13日(月)〜5月18日(月)

※4月13日(月)は13:30開場

(金)は19:00まで公開

陶磁器 茶文化
東西交易 水中考古

- 主催／明治大学文学部
明治大学博物館
福建博物院 (中国)
海のシルクロードの出発点
“福建”展開催実行委員会
- 後援／中華人民共和国駐日本国
大使館文化部 千代田区

福建省は東シナ海と南シナ海の接点に位置し、ちょうど台湾の対岸にあたる中国東南部の地域です。その海外交流は10世紀初頭から盛んになり、宋・元代(10世紀中頃～14世紀中頃)には中国を代表する貿易拠点となります。この地で生み出された様々な文化や工芸は、東アジアの海を渡って世界に広まりました。宋代に福建で生産された茶と茶道具は、中国国内で高い評価を得ただけでなく、日本など海外の茶文化に大きな影響を与えています。福建産の陶磁器も盛んに輸出され、世界各地の陶磁器生産に強い影響を及ぼしたのでした。この展覧会では、“福建”をめぐる海域文化にスポットをあて、中国国家一級文物多数を含む貴重な文化遺産の数々をご覧ください。



青釉四耳壺 (イランまたはイラク) 10世紀

- 会場／明治大学博物館特別展示室・常設展示室
- 入場料／500円

明治大学学生・教職員 リバティアカデミー会員 明大カード会員
明治大学博物館友の会会員 高校生以下の児童・生徒および引率教諭は無料
障がいをお持ちの方と付き添いの方は身分証の提示で無料

福建文化のあけぼの

西暦 907年に唐が滅亡すると、福建地方の有力者であった王審知は、やがて、後梁から閩国王に封ぜられます。彼の統治の下、福建の経済力は飛躍的に伸展します。王氏一族ゆかりの銅製香炉や王審知の次男の妻劉華の墓所から発見された陶俑など、福建文化早期の優品をご覧ください。また、元来、学術研究の盛んな土地柄であった福建は、朱熹をはじめ名だたる文人の出身地として知られますが、宋代(960～1279)には高級官僚への登用試験である科挙の合格者を多数輩出しています。彼ら文人の遺産として残された文物の数々を紹介します。



青磁五星盤 唐・651年



銀鍍金双鳳文合子
南宋・1272年

2009年度 明治大学博物館春季特別展

東西交易



銀貨（スペイン）18世紀初頭

閩国王家に嫁いだ劉華の墓所から発見されたヒスイ色の壺は、遠くイスラム世界からもたらされたものでした。この頃からすでに福建の対外交易は活性化しており、西から東から、多くの人々がアジアの海を行き来していたこととなります。福建にはそうした人々の移動を示す貴重な文化財が残ります。通商に用いられた木簡類、異国に没したキリスト教徒の墓碑、スペインの銀貨など、東アジアのみならず、中近東・ヨーロッパにも及ぶ海域文化のダイナミズムを実感いただきます。



キリスト教碑 元・1349年

陶磁器



青磁印花牡丹文盤（龍泉窯）元・14世紀

ヨーロッパで China と言えばそれは陶磁器を意味します。それだけ中国は世界の陶磁史をリードする巨大な存在であるということです。この展覧会の出展文物の多くを占めるのも陶磁器です。龍泉窯（浙江省）の青磁、景德鎮窯（江西省）の青花などは中国を代表する陶磁器ですが、福建地方にもたくさんの産地が展開し、多くの製品が日本にも輸入されています。中でも、日本の茶道具に大きな影響を与えた建窯の黒釉の茶碗や、徳化窯の白磁、漳州窯の華麗な赤絵がよく知られています。

茶文化



褐釉小壺
南宋・12～13世紀

喫茶の習慣は 8世紀後半頃から普及しはじめ、やがて、福建は茶の一大産地に成長します。五代の頃には茶園が開拓され貢納が始まっていますが、宋王朝の管理下にあった北苑茶園の製品は最高級の茶としてもてはやされました。日本との関わりでは、貴族や上級武士の間で茶の湯が盛んになった鎌倉時代後期から室町時代の中期にかけて、当時、唐物として垂涎的となったのが、福建産の黒釉の茶碗や茶入として用いられた褐釉の小壺でした。それをコピーした天目碗や茶入は日本国内でも盛んに生産されるようになります。

水中考古



五彩八宝文杯（景德鎮窯）清・17～18世紀 ※海水に漬かっていたため上絵が変色している

福建沿海はアジア各地やヨーロッパ方面と行き来をする交易船が盛んに通航する海域でした。その海底からは、積荷を満載した沈没船遺跡がいくつも発見されています。地面を掘るのではなく、水に潜って海底を探索して遺物を引き揚げるといふ「水中考古学」の成果により、そのリアルな実像が明らかにされつつあります。ここでは、近年におけるその成果の一部をご紹介します。白磁、青磁、青花…、数百年の眠りから覚め、海底から引き揚げられた陶磁器の優品の数々をご覧ください。

※この展覧会は、海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会の主催による巡回展覧会です。東京会場は明治大学博物館と学習院大学史料館の2会場となります。

学習院大学会場 東アジアの海とシルクロードの拠点“福建”—沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化—

- 主催／学習院大学日本学術振興会アジア研究教育拠点事業 学習院大学史料館 福建博物院（中国） 海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会
- 会場／学習院大学史料館展示室（北2号館1階） 豊島区目白1-5-1
- 交通／JR目白駅から徒歩5分 ■入場料／無料

開催記念シンポジウム

「水中考古学と福建の陶磁器」

日時 4月25日(土)・26日(日) 参加費無料 申込不要 当日会場にお越しください

《プログラム》

4月25日(土)13時～17時 明治大学アカデミーコモン2階特設会場

森 達也(愛知県陶磁資料館主任学芸員)「福建の古窯址・陶磁器と東アジア」

張 威(中国国家博物館水下考古研究中心主任)「青い文明を探る—中国水中考古の回顧と展望—」

石原 渉(アジア水中考古学研究所副理事長)「日本における水中考古学の成果と将来」

4月26日(日)10時～15時 学習院大学西2号館2階201教室

鶴間和幸(学習院大学文学部教授)「東アジア海文明と福建」

楊 琮(福建博物院院長)「漢代閩越考古」

荒川正明(学習院大学文学部教授)「福建陶磁と日本の茶陶」

今井 敦(東京国立博物館研究員)「日本に運ばれた福建産の貿易陶磁器について」

明治大学リバティアカデミー企画

オープン講座 特別展開催記念講座「東アジア・海のシルクロードと“福建”」

■日時 5月8日(金)13時～17時(開場12時30分)

■会場 明治大学アカデミーホール(駿河台校舎アカデミーコモン3階)

■受講料 一般1000円(特別展観覧料が無料になります) リバティアカデミー会員・博物館友の会会員無料 要申込

《プログラム》

加藤千洋(朝日新聞編集委員・明治大学講師)「世界遺産・福建土楼と客家(はっか)の世界」

村井章介(東京大学大学院人文社会系研究科教授)「中世日本の茶文化と福建」

加藤 徹(明治大学法学部教授)「近世福建系音楽の日本伝来と演歌の誕生—楽曲の実演も交えて」

司会・コーディネータ: 氣賀澤保規(明治大学文学部教授)

明大アジア史講座「東アジア海域文化と福建」

■日時 4月14日～5月19日(火) 15時00分～16時30分

■受講料 13,000円 要申込 ※受講にはリバティアカデミーへの入会が必要です

《プログラム》

4月14日 氣賀澤保規(明治大学文学部教授)「助走時代の福建と五代・閩国」

4月21日 櫻井智美(明治大学文学部准教授)「宋元時代の福建とマルコポーロ」

4月28日 寺内威太郎(明治大学文学部教授)「鄭和と鄭成功・倭寇時代の福建」

5月12日 荒川正明(学習院大学文学部教授)「福建陶磁と日本—華南三彩から織部、古九谷へ—」

5月19日 氣賀澤保規「東アジア海域文化のなかの福建」

申込・問合せ先 明治大学リバティアカデミー事務局(03)3296-4423 <http://academy.meiji.jp>

レクチャー&ワークショップ

「福建の茶と日本茶道」(講義と実演)

■4月30日(木) 15:00～16:00

■会場: 博物館教室

■参加費無料 申込不要 当日会場にお越しください

ギャラリートーク 列品解説と茶の夕べ

■金曜 17:30～18:30 4/17氣賀澤保規(明治大学文学部教授) 4/24外山徹(同博物館学芸員) 5/15櫻井智美(同文学部准教授)

■集合場所 特別展示室入口 ■参加費 無料(入場券が必要となります) 申込不要 当日集合場所にお集まりください

その他、アジア史・日本史・考古学専攻の大学院生による列品解説などを随時開催いたします。
詳しくはホームページや館内案内をご覧ください。

去る2008年12月9日、明治大学博物館は2004年4月のリニューアルオープンの日から数えて25万人目のお客様をお迎えしました。記念すべき25万人目となられたのは、富山県高岡第一高等学校の皆さんです。

来館20万人に達したのは今年の4月。その後もたくさんのお客様にお越しいただき、非常に早いペースで25万人を達成することができました。

これまでにご来館いただいた皆様、誠にありがとうございました。これからもより多くのお客様に訪れていただけるよう努めてまいります。



記念品贈呈の様子

2008年度博物館主催特別展 『氷河時代の山をひらき、海をわたる—日本列島人類文化のパイオニア期—』開催

昨年、10月10日から12月12日にかけて開催した特別展『氷河時代の山をひらき、海をわたる—日本列島人類文化のパイオニア期—』では、北海道から九州まで、全国25箇所の博物館や研究機関から550点に及ぶ資料をお借りしました。開幕記念講演会では、東京都立大学名誉教授・町田洋先生から最後の氷河時代の気候変動とヒトとの係わりについてお話いただきました。展示を通して、市民から研究者までの幅広い層に、氷河時代の日本列島に最初に定着したヒトビトをめぐる問題の難しさとロマンを感じ取っていただけたとしたら幸いです。この問題に取り組む考古学や人類学の今後の展開にご注目ください。今回は、たくさんの方々からアンケートにご感想・ご批判をいただきました。そのなかでも、いろんな学術分野で積極的に問題提起を行うことが、大学博物館ならではの特色だという言葉には、大いに励まされました。今後も、学問の科学的な面白さと厳しさを分かりやすく紹介する企画を展開したいと思います。なお、展示図録はミュージアム・ショップにて販売中(1,000円)です。



展示風景

特別展示室の空気環境改善処理

昨秋の特別展会期終了後、本年1月にかけて、特別展示室の空気環境改善処理を行いました。特別展示室は、国指定重要文化財をはじめとする貴重な資料を外部から借用して展覧会を開催するため、資料の変質・損壊につながるケース内の汚染物質を除去する必要があります。改善処理の対象としている汚染物質にはアンモニアおよび有機酸(蟻酸・酢酸)があり、シックハウス症候群で話題になったホルムアルデヒドもアルカリ性環境下で蟻酸に変化します。具体的な処置としては、換気促進と湿気の流入防止、そして汚染物質を吸着する「エアチューンシート」を、一定期間、展示ケース内の壁面に吊り下げ、床面に敷き詰めます。一定期間を経た後(2週間~1ヶ月)、「パッシブインジケータ」という試薬で汚染状況を測定します。これで検知の判定が出なければ、ひとまず処理が完了ということになります。しかし、展示ケースは密閉性があるため、躯体のコンクリート、建材、壁紙やクロス、また、展覧会時に使用した造作材や展示資料の影響で汚染物質が継続的に発生しており、汚染物質の蓄積を防止するためには、定期的に改善処理を実施する必要があります。



「エアチューンシート」による汚染物質の吸着処理



「パッシブインジケータ」による測定結果(アンモニア)。変色が少なく結果は良好

明治大学 東アジア石刻文物研究所の 活動と展示

氣賀澤保規 (明治大学東アジア石刻文物研究所所長・文学部教授)

1. 東アジア石刻学の意味

「東アジア石刻文物研究所」というやや変わった名前の「研究所」は2005年4月1日に発足した。それから数えて4年の歳月が経過しようとしている。この間、徐々にではある学内外に存在が知られてきているが、このたび博物館から与えられた機会を通じて、さらに広く認知をいただけることを願い、これまでの活動状況の一端を紹介してみたい。

私たちのいう「石刻文物」とは石に刻まれた資料、歴史的事実資料を指している。これには美術・図像も含まれるが、当研究所の主たる対象とするのは文字を石に刻したものの、すなわち地表に建てられた碑や地中(墓中)に納めた墓誌、あるいは儒教や仏教の経典を刻んだ石経などである。

周知の如く中国を中心とする東アジア世界(日本も含む)において、古来その時々の人々の思いをこめて碑刻などが作られてきた。それらは石であるゆえに風雪に耐え、後世に伝えられた過

去の記憶の証人であり、貴重な歴史の一次資料となる。本研究所ではそのような立場から、石刻文化の基をなす中国の1世紀から10世紀初めまで、王朝でいえば後漢から魏晋南北朝を経て隋唐王朝におよぶ時代に絞り、①石刻資料の収集と調査と整理、②それをふまえた情報発信と研究考察、という大きく二つの柱を立てることになった。

2. 東アジア石刻文物研究所発足の頃

当研究所の成立に先行して、10年近い準備の過程があったことを知っていただきたい。まず1997年5月から東京地区の若手研究者からなる魏晋南北朝隋唐石刻研究会を発足させ、2000年10月よりそれを中国石刻文物研究会に改め、石刻資料を多面的に論議する機会を作った。中国史の研究にあって、墓誌や碑文などの石刻が新たな資料として本格的に注目を集める、そのような見通しのもとで研究会は一步早く動き出した。

当初この研究会ではほぼ毎月、石刻資料めぐって蓄積された真摯な議論と共有された認識から、その後の多くの研究が生まれ、若手研究者が育ち、並

行して氣賀澤の『唐代墓誌所在総合目録』が刊行された。こうした実績の上に、2003年度より科研費(基盤研究B)

(「中国南北朝後期隋唐期の石刻文字資料の集成・データベース構築と地域社会文化の研究」)が認められた。そこでまず、旧版を大幅に改めた『新版唐代墓誌所在総合目録』を完成させ、世に問うた。後日中国側から入ってきた話では、本来中国側がすべきであったその仕事が、日本側に先を越されてしまった、関係者はそう残念がったという。

ちょうどその頃の2004年の10月、中国西安で、日本の遣唐使留学生「井真成墓誌」が発見されたというニュースがもたらされた。これは人々を驚かすに十分な貴重資料であった。墓誌とは何か、その時代性をどう読み解くか、国内で高まる関心に私どもはこれまでの蓄積をふまえて対応した。この機会に墓誌という石刻へ社会的認知が得られたことはありがたかった。

なお井真成墓誌の実物は名古屋で開かれた「愛地球博」で特別展示されたが、その折同時に並べられたレプリカは会期終了後、明治大学博物館に寄贈された。

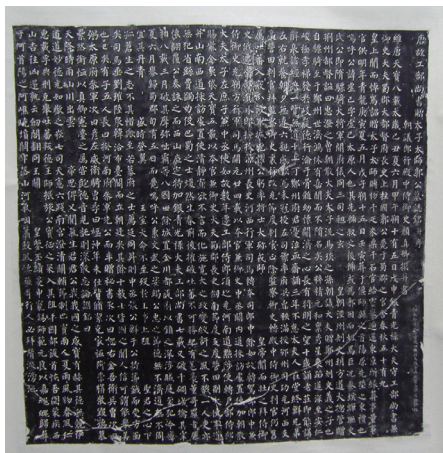


写真1 新発見顔真卿筆「郭虚己墓誌」(794年)
明治大学新収中国石刻貴重拓本展Ⅱにて展示



写真2 現地での調査(中国河北林旺石窟)



写真3 研究所寄託中国墓誌の拓本製作

3. 石刻を求めて現地調査

近年の科研費では、院生や若手研究者を研究協力者として海外調査に帯同することが認められている。そこでまず2004年3月、山東半島の仏教石刻を求めて、寒さが身に凍みる山野を歩いた。つぎは夏の河南・河北の山野を、汗みどろになって10日ほど動いた(2004年9月)。2006年夏には山西・陝西の碑刻や歴史遺跡を集中調査し、これで中国華北の主たるところを押さえ、今後の踏み込んだ研究のための足場を築くことができた。

調査のために登った山は数え切れないが、高いところでは山東の中心にある泰山が海拔1545m、山頂に多くの歴代碑刻があり、山麓の経石峪で知られた峡谷には、数十メートル四方もある大岩に刻された大字の金剛経がある。これは6世紀後半の北斉期と一応推定されているが、確かな時期も作成者もまだ確定できていない。この他、500m級であれば山東鄒州市の嶧山をはじめ、河北では邯鄲市の北響堂山、渉県の中皇山、房山雲居寺の石経山、山西では太原の天龍山や龍山、高平県の羊頭山などがざっとあげられる。

私たちの求める碑刻は多くの場合、あまり人の踏み込まない辺鄙な場所にある。荊が茂る岩道を歩いてやっとたどりついた先で目指す石刻を前に、当時の人々に思いを馳せながら調査し記録にのこす。そのときがもっとも楽しい時間になるが、そうした場所にも近年破壊の波がおよんでいることをしばしば確認する。盗掘と開発という波が……。

さて一日動き回って宿舎に着くのは夜の8時頃。10時をすぎてやっと夜食にありつくこともしばしば起こる。夜にはミーティングでその日を集約し、翌朝は8時には行動を開始する。そのようなハードな日程をこなし、実物の資料と向

き合うなかで若手諸君が日一日とたくましくなり、眼光も変わってくるのが分かる。それは大変うれしいことである。

4. 研究所の活動実績と今後の方向—— 展示活動とシンポジウムと研究成果

当研究所では石刻資料の拓本収集にも力を入れてきた。拓本をつうじて実物により接近でき、写真ではできない細部の調査も可能になるからである。残念ながら明大には拓本収集の実績はなく、作業はゼロからの出発であった。加えて、一部の書道関係者が高く購入したり、中国の富裕層がそこに手を広げてきているため、近年値段は高騰しており、その間をぬっていかんが学術的に重要なものを安く手に入れるかが問われることになる。

研究所の発足に先立って、私は幸いにも100点を越える旧拓を所蔵する方と接触し、すべて入手できた。それは清朝八旗の末裔とされる方の家に保存されてきたコレクションであり、傷みは多かったが初拓のものも含み、当研究所の貴重な財産となっている。これを核にして、その後の調査の折りや知り合いの紹介などを通じて入手に努め、今では800点を越えるまでになり、研究所の資料として外部にも知られてきた。

入手してきた貴重資料は広く知ってもらうために、明大博物館の協力をえて企画展を実施し、すでに下記のように4回を数えている。

第1回：2006年4月22日～5月10日

「明治大学新収中国石刻貴重拓本展」

第2回：2007年2月23日～3月14日

「洞窟に刻まれた末法の石経と聖像展」

第3回：同年3月17日～3月30日

「明治大学新収中国石刻貴重拓本展Ⅱ」

第4回：2008年2月27日～3月16日

「明治大学新収中国石刻貴重拓本展Ⅲ
唐代の石刻と文人文化展」

これらの展示で主体となるのは、パンフレット原稿づくりも含め研究所スタッフの院生である。ここで培われたノウハウは2008年夏の古代学研究所主催の企画展「国づくりと文字・伝承」でも大いに活かされた。

私どもは人的にも財政的にも基盤が弱い、限られた条件のなかできらりと光る存在感と役割を着実にはたしていきたい。最後に、上記以外の実績を示しておく。

・情報発信：ホームページ立ち上げ

(<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~ishiken/index.html>)、唐代墓誌所在総合目録・中国五代十國時期墓誌・墓碑総合目録稿・『西安碑林全集』所載「唐代墓誌目録」(<http://sekkokuken.mind.meiji.ac.jp/doc/find.htm>)、隋代墓誌目録検索 (<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~ishiken/researches/database.html>)

・刊行物：(前掲書を除く)

氣賀澤保規編著『復刻洛陽出土石刻時地記(郭玉堂原著)―附解説・所載墓誌碑刻目録―』(2002年)

研究所機関誌『東アジア石刻研究』創刊号(2005年)

論集『中国石刻資料とその社会―北朝・隋唐期を中心に―』(2007年)

・シンポジウム：

「東アジア史上の遣隋使シンポジウム」(2007年10月6日)

「顔真卿と近年発見の石刻資料シンポジウム」(2008年3月13日)

「唐代詩人韋應物と新発見墓誌資料シンポジウム」(同年3月19日)

「中国石刻合同研究会」(同年7月26・27日)

科研費成果報告会「中国仏教石刻をめぐる諸問題」(2009年1月10日)



写真4 唐代の石刻と文人文化展(2008年)



写真5 洞窟に刻まれた末法の石経と聖像展(2007年)

企画展 「国づくりと文字・伝承」

佐々木憲一 (明治大学文学部准教授)

2008年8月21日(木)から9月16日(火)まで、明治大学博物館の特別展示室において標記の企画展を開催した。この企画展は、吉村武彦明治大学大学院長・文学部教授(日本古代史)を代表とする文部科学省学術フロンティア推進事業「日本古代文化における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究」の、2004年度以来の研究成果を展示するものであった。ちなみに2008年度はその最終年度で、この大型研究の総仕上げの一環として企図した

ものである。主催は、この大型研究のセンターである古代学研究所である。

この大型研究は、それまで別個に実践されてきた文献史学、考古学、古代日本文学を統合し、弥生時代から平安時代に至る日本古代史を総合的に、多面的に解明するために発足した。代表者吉村の言葉を借りれば、「ひと(人)」「もの(物)」「こと(言)」に対する全体史的な学問統合である。この企画展もそれを反映して、多様な構成となっている。展示の骨格は、

碑の拓本や文字瓦といった日本と中国・朝鮮の古代文字資料である。国づくり、つまり国家形成過程において文字という記録手段が大きな役割を果たしているからである。同時に、文字がない時代や社会においては、伝承も無視できないメディアであるため、文字なしで伝わった儀礼のビデオも上映した。さらに国家形成過程の研究史がわかるよう、図書資料も展示したのは、図書館以外の企画展としては新しい試みと自負している。

具体的には、第1ステージ『『国づくり』の議論～現代の研究まで』、第2ステージ「国家と文字」、第

3ステージ「口承と物語・祭祀文化」からなる。文字瓦などこの大型研究で分析の対象とした資料そのものと、大型研究の成果を位置づけるための比較資料を学外から借用したほか、明治大学図書館と博物館が所蔵する関連資料を展示した。以下、各ステージの概要を説明する。

第1ステージ『『国づくり』の議論』では、国家形成論研究の基盤や背景となった図書を中心に展示した。日本では『日本書紀』、『古事記』、『風土記』(複製本、版本)がその代表である。日本における国家形成期を世界史のなかに位置づけるため、欧米の理論的枠組み、特にマルクス主義的思考も導入された。それらの実例としてマルクス『資本論』初版や、アメリカ人のルイス＝ヘンリー＝モルガン『古代社会』初版(共に明治大学図書館蔵)を並べてみた。マルクス主義的な理論書は当然のこととして、モルガンの『古代社会』を日本で取り上げたのは、意味がある。というのは、『古代社会』は日本人考古学者の多くが評価しないアメリカ合衆国プロセス考古学の基盤であるが、実はこの著作が晩年のマルクスに大きな影響を与え、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』に結実したのである。エンゲルスの『起源』は日本における国家論研究の基盤の一部を成しているため、合衆国プロセス考古学と日本における国家論研究は、従兄弟同士のような関係にあることを知らせたかった。

また明治大学で永く文化人類学を講じ



図1 企画展ポスター

た岡正雄も日本における国家論研究に寄与しているため、彼の業績(パネル)や旧蔵書を展示したほか、明治~大正期の日本史の教科書も国家論研究の背景として取り上げた。明治初期の教科書では、考古学に基づく「神武天皇」以前の庶民の暮らしなどを記述しているのに対し、1890年の教育勅語以降の国定教科書では、考古学的記述は排除され三種の神器など天皇家の由来と支配の正当性を明確化する内容に大きく変容していることがわかる。

第2ステージ「国家と文字」はこの企画展の中心を成す部分で、古代中国・日本の石刻資料の拓本や、数少ない古墳時代文字資料、文字瓦など多数を展示した。まず拓本としては、高句麗好太王碑文の拓本帖(4冊組)を挙げたい(図2)。これは明治大学が図書館特別資料として2004年に購入したもので、「北京某本」として研究書でも紹介された貴重資料である。本学図書館はこの拓本のデジタル画像を実物の碑と同様に接合し、高さ6.3m、幅1.5m以上を4面、表装したのも所蔵しているが、この大がかりな物を吊すための仕掛けにコストがかかり、予算的制約から展示できなかったのは大変遺憾である。その他、研究分担者氣賀澤保規教授(明治大学文学部)主宰の明治大学東アジア石刻文物研究所が所蔵する中国古代の石碑の拓本も、「三体石経残碑」(241年頃)や「大晋龍興皇帝三臨辟雍頌」(278年)など貴重なもの6点が出展された。前者は儒教經典を春秋戦国期の古文、始皇帝時の小篆、漢代の八分隸の三書体で刻まれ、洛陽の太学の前に立てられた碑の一部の初期の拓本。後者は洛陽の太学を武帝が三度、皇太子(後の恵帝)が二度訪れたことを頌えるために立てられた碑の拓本である。拓本だけでは立体性に乏しいので、群馬県高崎市所在の山ノ上碑のレプリカを国立歴史民俗博物館から、中国の墓誌の本物を氣賀澤教授のお知り合いから借用した。

古墳時代の文字資料は極めて少ないが、明治大学博物館が所蔵する「火鏡」(縁に「火鏡」と刻まれた5世紀後葉の倣製鏡)を出展したほか、国立歴史民俗博物館から和歌山県橋本市隅田八幡神社

蔵国宝人物画像鏡レプリカと千葉県市原市稲荷台古墳出土「王賜」銘鉄剣レプリカ、埼玉県教育委員会から国宝金錯銘鉄剣レプリカを借用した。国宝人物画像鏡レプリカは、館外貸し出しをしない前提で制作されたが、隅田八幡神社宮司様の格別のご好意で出展が可能となった。

奈良時代になると、支配・統治のための言語として漢字・漢語・漢文が用いられた。その実例として、この大型研究で購入した『令集解』(版本)(9世紀半ばに成立した、養老令の諸註釈の集成)を展示した。またこの大型研究で集成した千葉県栄町龍角寺五斗葺瓦窯遺跡文字瓦多数だけでなく、群馬県前橋市山王廃寺出土「放光寺」文字瓦、神奈川県千代廃寺、栃木県那須官衙遺跡、大阪府高井田廃寺から出土した「五十戸」文字瓦を借用、展示した。山ノ上碑には、「放光寺僧」という記述があり、その「放光寺」が山王廃寺であることが、展示資料からわかる。また「五十戸」文字瓦は、現在知られる3点すべてを一堂に集めたことに大きな意義がある。「五十戸」(さと)は里、郷と標記をかえるが、この出土文字資料は当時の地域編成を知る重要な手がかりである。

第3ステージ「口承と物語・祭祀文化」をテーマとした。明治大学図書館から『万葉集』(版本)と『源氏物語』の16世紀末頃の写本を借用、展示したほか、徳川美術館より国宝源氏物語絵巻「蓬生」、大阪府和泉市立久保惣記念美術館より、源氏物語手鑑「若菜」下段「女楽」の写真を借用、展示した。

古代においては、祭祀は現代以上に大きな意味があったと考えられる。祭祀は文献に記録されるものもあるが、祭祀そのものとして後生に伝承される場合も多い。特に韓国や沖縄の祭祀は、日本古代の祭祀を考える上で貴重な比較資料である。この大型研究では、韓国の世界無



図2 好太王碑拓本(北京某本)部分(明治大学図書館提供)

形文化遺産である江陵端午祭と濟州島のヨンドンクッの2例を調査したので、後者についてはビデオを上映した。ヨンドンクッは、済州市チルモリ地区で毎年旧暦2月14日に行われる五穀豊穰、海上安全・大漁をヨンドン神と龍神に祈願する祭りである。韓国では日本的な神社はなく、したがって神主もいないが、日本同様に山の神や田の神、村の神、川の神、竜神など様々な神を祀っている点で日本と共通する。それら神々を管理し奉仕するのがムーダン(巫覡)であり、ムーダンが執り行う祭祀がクッである。日本の神社祭祀において消滅したものがムーダンのクッには伝承されている可能性がある。沖縄の祭祀については、宮古島の夏穂祭り、祖神祭、石垣島のマユンガナシ(旧暦9月10日に行われる節祭)などのビデオを上映した。

以上、「日本古代」をキーワードに、明治時代の教科書から文字瓦、『源氏物語』に至る様々な資料を一堂に集めた。学際性という面で、この企画展が今後の日本史研究に大きな貢献となることを祈りたい。

大名と領地

～譜代大名内藤家の転封～ (上)

日比 佳代子 (刑事部門担当学芸員)

譜代大名の内藤家は、天正一八年(1590)に家康の関東移封に従って関東に移り、上総国佐貫に二万石を拝領した。その後、漸次加増されて、四万五千石まで石高を増やすが、さらに元和八年(1622)新たに二万五千石を加増されて、陸奥国磐城平七万石へ領地を移される事になる。この時、それまで磐城平城主であった鳥居忠政は出羽国山形二〇万石へ領地を移され、内藤家の旧領である佐貫には武蔵国深谷から松平(桜井)忠重が一万五千石で入封している。磐城平では、内藤政長、忠興、義概、義孝、義稠、政樹と六代の藩主が統治を行うが、延享四年(1747)、今度は日向国延岡へ領地を移される事になった。この移動は、内藤政樹磐城平七万石、牧

野貞通延岡八万石、井上正経常陸国笠間六万石の三大名の領地を入れ替えるというもので、内藤家は延岡へ、牧野家は笠間へ、井上家は磐城平へと領地を移されている。

江戸時代に行われたこの様な大名の配置替えの事を転封てんぽうと言う。転封は、徳川家康、秀忠、家光三代の将軍の時、最も盛んに行われている。これは、徳川氏による新しい領国体制の確立という目的のもと、外様大名の改易と転封、それに伴う徳川一門と譜代大名の配置という形で行われた。体制が確立した寛永期以降、外様大名の転封は減少するが、幕政執行の立場から享保期頃までは譜代大名の転封も盛んに行われている。

これまでの転封研究は上記の様な政治史的な観点から分析され、多くの成果を上げてきた⁽¹⁾。しかし、従来の転封研究が有した政治史的な「幕府と藩」という視点から、領地に視点を移すとどうだろうか。領民にとって藩主が替わるという事は大きな意味を持った筈である。自分たちのお殿様だと思っていた存在がどこかに行ってしまうという事、新しいお殿様がやってくるという事、それは当時の人たちにとってどの様な意味を持ったのか。転封後、すぐに藩政機構が機能し、新領地を統治できたのは、どの様な仕組みがあったからなのか。転封に際して、大名同士はどの様なやりとりをしているのか、またその事が新領地経営にどの様な影響



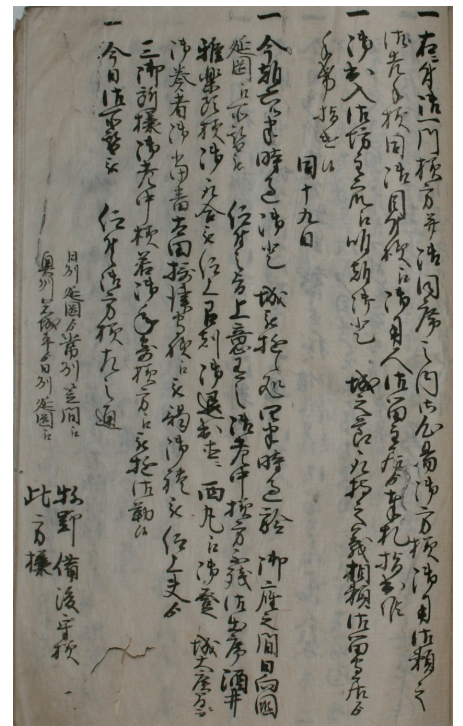
2009 年度秋季特別展「大名と領地—お殿様のお引越—」展出展予定品 『延岡城下図屏風』(個人蔵)

をもたらしているのか。このような問題に対し、従来の転封研究は十分な答えを持ち合わせていないのである。「幕府と藩」から「大名と領地」へと視点を移した時、これまでとは異なる転封研究の可能性が開かれるだろう⁽²⁾。

明治大学博物館蔵内藤家文書には、元和八年の転封に関わる史料は殆ど残されていないが、延享四年の転封に関しては数多くの史料が残されている。譜代大名家は、多くの場合転封を経験しているのです、その事も一因となり、江戸時代の統治史料を十分に残していない場合が多い。その様な状況の中で、内藤家文書は、転封以前の磐城平時代の史料を相当数残し、また転封に関わる多くの史料と、転封直後の統治史料をも残す、貴重な大名家文書である。明治大学博物館 2009年度秋季特別展は、この貴重な史料を核にして『大名と領地～お殿様のお引越し～』を開催する。展示に先立って、延享四年の内藤家の転封の様子を覗いてみる事にしよう⁽³⁾。

延享四年三月十九日、内藤家は江戸城にて日向国延岡への所替を命じられた。その日のうちに勘定奉行から内藤家の留守居に出頭要請があり、翌日、幕府勘定所にて磐城平領の生産力を書き上げた「郷村高帳」を作成し提出する様にとの指示が出された。内藤家では一九日の段階から関係各所に使者を送っているが、その

後も、延岡の周辺大名・幕府代官へ転封の挨拶を行い、幕府の各役職へは転封に伴う指示や家臣の移動の取り計らいを願う挨拶を行っている。また、共に転封する事になった牧野家、井上家の留守居とは会合を重ね打ち合わせに余念がない。国元では「郷村高帳」や磐城平領の統治に関わる関係資料が作成され、それを受けて江戸屋敷の役人が勘定所役人とやりとりをして詳細を詰め、六月に幕府提出となっている。「郷村高帳」の作成期間は三ヶ月かかっておらず、国元での作成はかなり急がせた様である。また、勘定所役人の内容確認が終了した後、内藤家側では清書をしたいと申し出ているが、勘定所役人は、急ぎだからこれをそのまま提出せよと指示している。ここからも転封準備があわただしく進められている様子が窺える。この他、三月二九日には、加藤勘兵衛、斎藤儀左衛門らが大阪での業務担当を命じられ、江戸での打ち合せを経て六月一六日に大阪入りしている。磐城平からの移動は、大坂までは陸路で、大坂からは海路で移動するため、宿場の問屋への手配や家中が乗船する舟の手配などを行わなければならないのである。また、六月の下旬には延岡の松山村大庄屋吉本辰右衛門と柳沢町別当吉田嘉治郎が大坂の加藤勘兵衛の旅宿を訪れ、羽織袴姿で町在の惣名代として所替の祝儀を上げている。延岡の領民にとっても、所替の準備が始まっているのである。(次号に続く)



「奥州岩城平日州延岡御所替覚帳」
(内藤家文書 1-20-313)

備が始まっているのである。(次号に続く)

(1) 例えば、藤野保『幕藩体制史の研究』(吉川弘文館、1975年)等。また近年、谷口昭氏により近世における家産官僚制を検討するという切り口から転封研究が行われており注目される(『近世の家産官僚—譜代大名の転封を素材として』、『名城法学』41-4)等)。

(2) この様な視点は、地域社会と藩の具体的な関わりや藩同士の関係などを問う近年の藩研究の課題に答える事にもつながるであろう。

(3) 「奥州岩城平日州延岡御所替覚帳」(内藤家文書1-20-313)、『宮崎県史』通史編近世上、史料編近世2(宮崎県)などによる。



「吉祥文」と呼ばれる文様があります。縁起のよい意味を想起させる動植物や小物を定形化した文様の総称で、その意味も形も様々です。今回はその吉祥文の中でも特に日本人になじみ深い「松」「鶴亀」「州浜」を盛り込んだ長寿・招福を意味する「蓬萊鏡」という名の和鏡のお話です。

そもそも和鏡とは国風文化が成立した平安時代以降の国内産の鏡を指し、直角に立ち上がった縁と、それまでの鳳凰・龍虎・唐草といった大陸的なモチーフから鶴亀・菊・松など身近な動植物へと変化した鏡背文様を特徴とする鏡です。当館では現在 41面の和鏡を所蔵しており、「蓬萊鏡」に分類される鏡は全部で 6面ありますが、その中から収蔵番号 A-183の鏡をご紹介します。

一般的に江戸時代の蓬萊鏡では亀を模した鈕を中心に、右から上方にかけて松樹、下方に波打ち際の形を意匠化した州浜、左には二羽の鶴が配されます。亀鈕の頭部を左にし、上方にいる鶴は羽を広げて首を下に曲げ、逆に下方にいる鶴は上の鶴を仰ぎ見るように頭を上げ、この三者の口先が接吻しているこの構図は今回ご紹介できなかった残り五面全てに共通し、日本全国にある蓬萊鏡についても大変多く見られる特徴で、江戸時代の蓬萊鏡における代表的な定型として普及していたことが窺えます。

A-183蓬萊鏡は江戸時代前期頃の作で、直径は 12.2cm、そして縁の高さは 1.6cmあります。長寿を意味する松は枝ぶりを肉厚の彫りで強調し、亀鈕には亀甲が表現され、鶴は尾羽までの羽毛の表現がなされるなど細部まで作り込まれていることが見て取れます。亀鈕の下には笹葉が敷かれ、鶴の左側には梅花を散らし「松竹梅」揃いで画面に華やかな趣を添えています。この鏡で特に注目したいのは画面下方に仔亀が一匹と仔鶴が三匹表現されている点で、蓬萊鏡の持つ意味の中でも子宝や子孫繁栄を強調する表現になっています。また館蔵蓬萊鏡で唯一銘が施されており、右下方に小さく「天下第一」(写真2)と見えます。これは安土桃山時代、織田信長の定めた手工芸者の生産意欲高揚を目的とした称号公許制度によるもので、鏡師を含めた各種工芸人集団の中からそれぞれ一人に与えられた称号でした。しかし乱用が相次ぎ江戸時代前期になるとほとんどの鏡師が名乗るようになったため、残念ながらこの銘の場合は産地や鏡師の特定に直接結びつくものではありません。

このように銘が乱用されるほど江戸時代では鏡の需要が高まっていた。もともと鏡型は粘土にへらで直接文様を描き出

して製作するものでしたが、一つの型から一面の鏡しか作れず、それらは主に「誂」と呼ばれる禁裏御用達の品のような特別に作られたものでした。当然庶民には手の出せない高価なものです。そこで江戸時代後期に弥生時代からあった「踏み返し」と呼ばれる技術が隆盛します。これは元になる鏡を砂型の上に押し付けて鋳型を作る非常に簡易なもので、一つの型から何面もの鏡を製造することが可能でした。これにより安価な鏡が大量に生産できるようになり、ようやく庶民にも鏡が普及するようになります。しかしこの「踏み返し」を何度も繰り返すことで文様は徐々に粗く、不鮮明になってゆきま

した。例えば収蔵番号 A-185の蓬萊鏡を一部拡大した写真 3をみるとその違いは明らかです。ちなみに「誂」をもとに踏み返したものを「似」、以下同様に踏み返す度に「紛」「本間」「又」「並」「彦」と材質や大きさも含めて七段階の格付けがなされ、下に行くほど安価ですが粗悪な造りになってゆきました。

さて今回ご紹介した資料は円鏡と呼ばれるほぼ真円の鏡です。室町時代に柄付き鏡が登場するとその使い易さから瞬く間に広まり、それまで主流だった円鏡は一般家庭から姿を消してしまいました。しかし寺社への奉納用あるいは武家・豪商などの婚礼調度として

円鏡は残り続けます。柄鏡を襲の鏡とするならば円鏡は晴の鏡としての役割を担ってきました。だからこそ同じ文様、同じ配置という定形化した形式が何よりも重んじられたのでしょう。けれどもその一面一面には鏡師の個性や流行が如実に表れています。蓬萊鏡は晴の日の寿ぐ鏡であり、また時代を映し出す鑑でもあったのです。



写真 1



写真 2



写真 3

(主要参考文献)

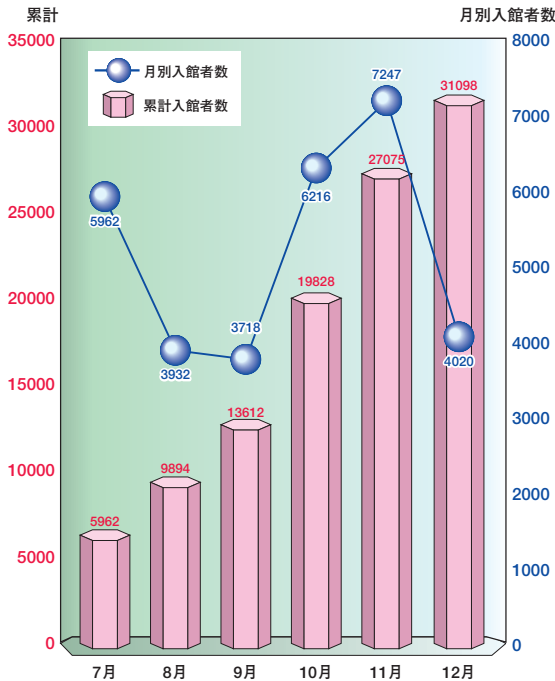
青木豊 1992『和鏡の文化史—水鑑から魔鏡まで—』刀水書房

ポーラ文化研究所 1989『ポーラ文化研究所コレクション 2 日本の化粧—道具と心模様—』

(中山 仁美)

明治大学博物館入館者数の動き (2008年7月～12月：延べ人数)

2004年4月以降の総入館者累計 254,524人



特別展来館者数内訳		開催日数	来館者数
7/9～7/29	明治大学博物館友の会 20年の歩み	21日間	1846
8/21～9/16	国づくりと文字・伝承	19日間	1014
10/10～12/12	氷河時代の山をひらき海をわたる -日本列島人類文化のバイオニア期-	64日間	3902



「氷河時代の山をひらき海をわたる」内覧会

7月～12月	延べ人数
図書館利用者	2680
講座受講者	1383
黒耀石研究センター利用者数	4715

団体見学の記録 2008年7月～12月

- 【一般】** 法務省法務総合研究所国際協力部(15名)・水無月会(20名)・板橋グリーン・カレッジ OB会(77名)・NHK学園新宿オープンスクール(25名)・社団法人中小企業診断協会東京支部「学校ビジネス研究会」(15名)・埼玉県立越谷北高等学校 PTA(86名)・船橋トラベル散策会(13名)・めいせき倶楽部(5名)・新宿さつき会(13名)・瑞き会(15名)・埼玉県立熊谷高等学校 PTA(27名)・NPO東京都ウォーキング協会(40名)・長和町民大学(30名)・下町歩き歩け会(25名)・明治大学長野県父母会(15名)・かながわ考古学同好会(15名)・東京都多摩支部町田地域支部(15名)・鬼平であそぶ(13名)・清真学園中学校・高等学校 PTA(53名)・よみうり文化センター川越(16名)・彩の国いきがい大学3期校友会(30名)・騎西町民生委員・児童委員協議会(34名)・国際警察センター語学研修科(32名)・小平市中央公民館「シルバー大学第35期」(60名)・蕨史跡探訪会(20名)・遊幸会(25名)・読売文化センター「江戸蕎麦屋めぐり」(15名)・横浜青葉史談会(12名)
- 【小・中学校】** 東京都国分寺市立第一中学校 2年生(6名)・山形県東置賜郡川西町立第一中学校(5名)・東京都江東区立亀戸中学校(20名)・明治学院中学校(60名)・東京都立小石川中等教育学校(18名)・桐朋女子中学校(51名)・千葉県松戸市立新松戸南中学校(6名)・東京都墨田区立両国中学校(13名)
- 【高等学校】** 栃木県立学悠館高等学校歴史研究同好会(12名)・長野県飯山北高等学校(44名)・宮城県仙台第一高等学校(7名)・広島県立賀茂高等学校(6名)・神奈川県立茅ヶ崎北陵高等学校(43名)・茨城県立鹿島高等学校(40名)・広島県立海田高等学校(25名)・茨城県立水戸桜ノ牧高等学校 2年生(40名)・長野県長野西高等学校 1年生(30名)・文華女子高等学校(30名)・明治大学付属中野高等学校 1年生(200名)・高輪高等学校 1年生(26名)・群馬県立松井田高等学校 1年生(80名)・千葉県立成田国際高等学校 1年生(25名)・群馬県立桐生高等学校 1年生(40名)・長野県塩尻志学館高等学校(14名)・茨城県立水戸第二高等学校 1年生(45名)・東京都立八丈高等学校(4名)・埼玉県立不動岡高等学校(75名)・埼玉県立大宮東高等学校(30名)・熊本県熊本市立必由館高等学校(80名)・富山県高岡第一高等学校(63名)・東京都立両国高等学校(21名)
- 【大学・大学院・専門学校】** 日本ジャーナリスト専門学校(13名)・専修大学履修セミナー(14名)・帝京大学法学部法律学科1年生(20名)・杏林大学大山ゼミ(15名)・武蔵野大学(37名)・駒澤大学考古学専攻(10名)・明治大学経営学部公共マーケティング論受講生(60名)・情報アシスタント(20名)・早稲田大学法務研究科(12名)・明治大学総合講座日本近代史と明治大学受講生(20名)

M2 カタログ

ミュージアムショップ「エムツー」で販売しているグッズを紹介するこのコーナー。第13弾はコースターをご紹介します。



カラー：赤(ニュルンベルクの鉄の処女)
黒(遮光器土偶)
価格：各色 1,100円(2個セット)

レザーならではの質感が好評のオリジナルコースター。中心には当館の人気(?)資料、ニュルンベルクの鉄の処女と遮光器土偶があらわれています。2個セットなのでとってもお得。贈り物にも最適です。使い込むほどに味が出てきますので、くつろぎの時間にお気に入りのグラスを置いてみてください。

売り上げベスト3 (2008年7月～12月)

- | | | |
|----|-------------------------|--------|
| 1位 | 特別展「氷河時代の山をひらき、海をわたる」図録 | 1,000円 |
| 2位 | 『常設展示案内ガイドブック』 | 800円 |
| 3位 | 一筆箋(土器) | 400円 |

友の会分科会「古文書の基礎を学ぶ会」

美術館や博物館で良く見かける「くずし字」。何を書いているのかさっぱり判らない。少しは読めるようになったら楽しいだろうな、でもどうして勉強すればよいのかも判らない。

そんな人達にとって強い味方が、明治大学リバティアカデミー講座の一つで、古文書学習の基礎から教えてくれるので定評のある、明治大学博物館入門講座「今日から始める古文書講座」です。

そこに私達は2008年4月に受講し8月に終了しましたが、次の学習の機会がありません。なにしろ、修了者は2度と同じ講座は受けられない仕組みなのです。

ご承知のように、博物館友の会には既に1994年誕生の「古文書を読む会」と1999年誕生の「平成内藤家文書研究会」との二つの古文書学習の分科会がありますが、超初心者の私達にはとても歯が立ちません。

そこで、8月の終了生が中心になり、もう少し学習を続けたいとの思いで2008年11月に発足した、友の会の中で最も新しいできたての分科会です。

毎月1回(第1月曜日13時30分～15時30分)明治大学博物館教室に集まり、学習会を開催しています。アドバイザーは、博物館入門講座「今日から始める古文書講座」を担当する、学芸員の日比佳代子先生です。

学習会は毎月課題(基礎的古文書)が与えられ、それを各自が予習してきます。当日順番に2～3行を黒板に書き出します。もちろん判らない字がありますが、そこは〇〇と空けておきます。次の順番の人が補充し読みます。それを繰り返して一つの文書を何とか解いて行きます。途中判らない所は皆で検討しあいます。この過程はわいわいがやがや結構楽しくやっています。

ここで何人かのメンバーを紹介いたします。いつも賑やかで会のムードメーカーで地域の活動にも熱心なIさん。社会人の時も多趣味に生きる現在も何時も一緒、他もうらやむ程仲の良い、動のSさんと静のOさん。江戸時代に興味を持ち、区の博物館ボランティアもつとめるHさん。考古学から工芸まで多方面に活躍、明大博物館解説員もつとめるOさん。家のルーツをもとめ古文書に取り組むご主人に合わせて、古文書の学習を始めたまさに夫唱婦随のHさん。現在博物館友の会にある7つの友の会の内6つに所属し、多方面の課題に取り組むSさんなど実にさまざまな人が集まる楽しい会です。

現在(1月末日)会員数は10名、3月からは08年度下期の講座卒業生も加わり14名になる予定です。学習のやり方から最大20名を目標に今後の活動を続ける予定です。

(古文書の基礎を学ぶ会 総務 平井 孝雄)

博物館 友の会から

【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1
明治大学博物館 友の会宛

メールアドレス meihakutomonokai@yahoo.co.jp

※博物館事務所に、友の会の担当者は常駐していません。連絡は必ずはがきまたはメールでお願いいたします。

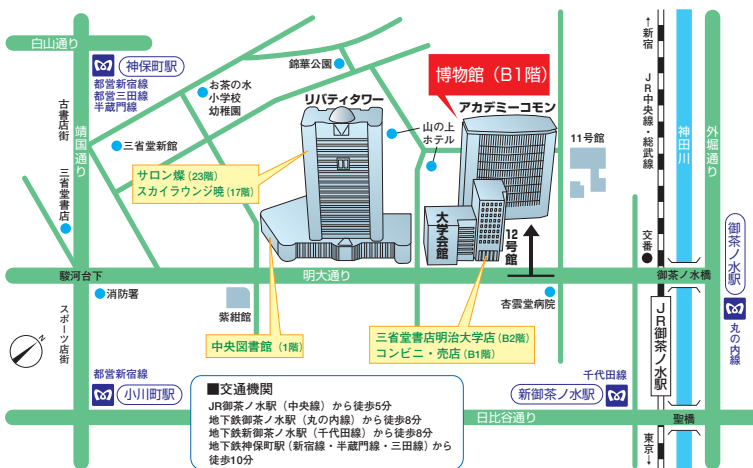
博物館案内

【博物館案内】

- ◆開館時間
10:00～17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏期休業日(8/10～8/16)
冬期休業日(12/26～1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
※開館時間・休館日には変更場合があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

【図書室ご利用案内】

- ◆開室時間
月～土 10:00～16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は原則閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



編集後記:大学の研究成果を広く社会に周知する方法のひとつとして、「展示」がより一層重要視されてきています。展示の場の提供のみならず、開催にあたって準備や運営、技術的な面でサポートすることも大学博物館の重要な役割と能力です。学習院大学との共催特別展や学内研究所の企画展は、そうした活動の一例です。過去の研究成果とともに、研究の最前線を知る「場」へ。今号は明治大学博物館のチャレンジの一端が現れています。